第４４回ジュニアオリンピック陸上競技大会

（１０/２５～２７ 横浜日産スタジアム）RESULTS

Ａ女子１００mYH　村上　瑞季	予選３組	１４：８９（－０．７）１着
	準決勝１組	１４：６３（－０．９）２着
	決　勝	１４：７０（＋０．２）8位

第４４回ジュニアオリンピック陸上競技大会。日本一の規模を誇る横浜・日産スタジアムで開かれる学年別の全国大会となる。Ａクラス（中学３年生）の種目の参加標準記録は、夏の全中の入賞記録に相当する高い記録が設定されている。３日間でおこなわれる大会規模を維持するために、高い参加標準記録を設けた上で、誰も突破者がいない場合は各都道府県でひとりだけ出場できるというシステムとなっている。各種目１名ずつ、そしてABC共通選抜リレーにエントリーすると、３０～３２名規模のエントリー数になる。プログラム１１５ページに記載されている都道府県別の競技参加者数の表を見ると、一番多いエントリー数が兵庫県の６２名。そして、２ 番目に多いのが大阪府の６１名。そして３番目が千葉県と埼玉県の４５名となる。さらに、種目別の最多参加人数はABC男子円盤投げで兵庫県の７名、続いてＡ女子１００mYHで大阪の６名となる。つまり、大阪のＡ女子１００mYH にはこの全中入賞レベルの高い参加標準記録を突破している選手が６名いることになる。この大阪の出場選手を決めるジュニアオリンピック挑戦記録会で、最後の突破者で６番目の選手となるのが、今回東雲から出場する村上瑞季である。だからこそ、たとえ大阪６位であっても、この大会の出場が決まってから「本気でジュニアオリンピックで入賞しよう！」と、何度も何度も村上に言い続けてきたのだ。夏の全中予選落ちであった村上は、その言葉を信じてこの大会までしっかり練習を積むことができた。

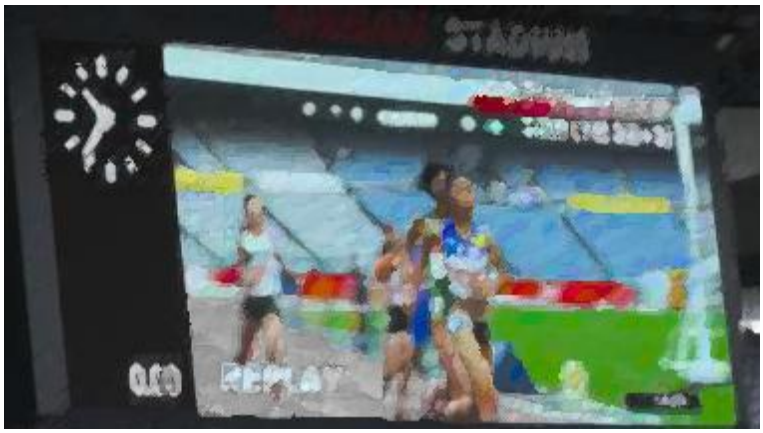
例年どおり、自分は大阪中体連強化部の一員として、水曜日の晩から車で移動。木曜日の朝から場所取りをして、昼過ぎに大阪選手団といっしょに村上が競技場に到着して、元気そうな顔を見たときは、妙にほっとしたものです。自分は大阪女子選抜リレーの調整練習を見なければならないので、村上のハードルのアプローチ練習は強化委員長でもある枚方長尾中学の島津先生にお願いした。「村上のアプローチとってもよかったですよ。調子は全然問題ないと思います」と島津先生。順調な仕上がりぶりに、ますます闘志をかきたて

たものです。

大会初日。台風の接近による風の強さが気になった。昨日も小雨まじりの天気で、一度も横浜の太陽を見ていない。今日も同じような天候であった。朝一番にホテルのバイキングで朝食を摂り、７時３０分頃ホテルを出発。村上と２人で歩いて８時前にサブトラックに到着して、早めにアップを開始した。アプローチ練習を見ていると、今回はやや動きが固い印象を受けた。珍しいことに、２台目を越えて３台目のハードルで立ち止まることもあったくらいで、緊張しているのだと思った。そのことには触れずに、納得のいくアプローチができるまで何度も繰り返した。やっと村上らしいスピードのあるアプローチができたところで練習を切り上げた。予定より本数が多くなり体力を余分に消耗したかもしれないが、全国の予選レースをしっかり走らせたい思いの方が強かったのだ。夏の全中予選落ちのような結果は絶対避けなければならないのだ。

１０時０５分競技開始、Ａ 女子１００mYH 予選。村上は３組６レーンに登場。細かな雨が降り続いていて低温である。夏の全中で勝負したのが JH（ジュニアハードル）、今回は世界仕様の YH（ユースハードル）。ハードルの高さは７６．２cm で同じであるが、インターバル（ハードルとハードルの間の距離のこと）は０．５m広くなって、８．５m。レース前のアプローチ練習に注目していた。村上は普段どおりの素早い動きであった。あとは、ピストルが鳴って走り出した時に（踏み切りが近すぎて）詰まらないようになることを願うばかりであった。スターターの低い声に場内が静まりかえる。ピストルの閃光が光ると８人の走者がいっせいに飛び出した。１台目の入りは抜き足がやや遠回りしてぎこちない印象を受けたが、２台目からぐんぐんスピードがあがる。６台目を過ぎた当たりで先頭争いは村上を含めた３人の選手。３レーンの選手が９台目のハードルまではわずかにトップを走っていたように見えたが、そこから村上が追いこんで、見事に１着でフィニッシュ。難なく準決勝進出を決めた。記録は１４秒８９．向かい風０．７m。まずはほっと胸をなでおろした。順調な滑り出しとなった。

勝負の準決勝を迎えた。大会前のランキングでは村上の YH の自己ベスト１４秒５３は１２番目にランキングされているので、予選突破はある意味当然の結果として受け止めていかなければならない。身長が１６０cm にも満たない彼女は、身長の割に大きな走りができる選手で、JH より YH の方が記録は上回る選手となる。（彼女の JH のベストは１４秒６２）準決勝は全部で３組。各組２着と３着以降の記録上位者プラス２名の選手で争われる。２４名の選手を８名にしぼる準決勝、全国の大舞台ではどんなに強い



選手でも慎重にかつ万全を期して臨まなければならないラウンドとなる。「サブトラックでもう一度アプローチ練習をしたいです」と、村上が言う。自分のイメージと同じであった。アイシングをすませて、トレーナーの小西さんにマッサージをしてもらい、１１時３０分過ぎに大阪ベンチを後にした。

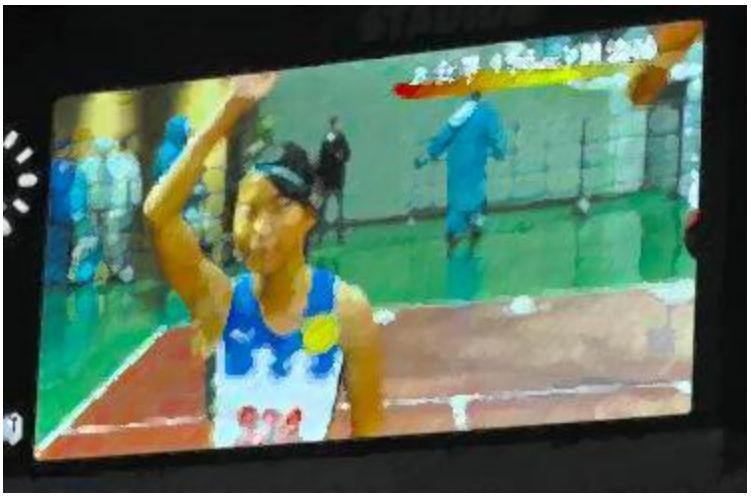
サブトラックではもう一度、アプローチ練習にこだわった。スタートの反応時間が悪くてもいいから、１台目の板の上を通過するときのスピードをあげていきたいのだ。そのスピードがあがればあがるほど、リード足が着地して次の足（抜き足）が地面をとらえるのが早くなる。そのリズムができてしまえば、ハードルを越えるたびにスピードがあがっていく。そのパターンを何とか強くイメージさせたかったのだ。今回は本数を限定して、早い目に練習を切り上げた。サブトラックを後にして、２人で選手招集所に向かうらせん階段を上る。毎年のように、今まで選手と共にこのらせん階段を上りながら何度も夢に立ち向かってきた。村上は１年生のときは１年リレーのメンバー入りさえできなかった１００ｍ１５秒台後半の選手。ここまでの道のりは平坦でもなく、近道でもなかった。結果が出るまでずいぶん時間が経ってしまったけど、決して立ち止まることなく、このらせん階段のように緩やかであるが、それでも少しずつ着実に上ってきたのだ。そんな村上の道のりをよく知っていただけに、今こうやって全国の決勝進出を賭けていることに感慨深いものがあった。

１３時２０分、Ａ女子１００ｍYH 準決勝。大阪のハードル六人娘は順調にこの準決勝に駒を進めて、各組に偶然にも２人ずつ分かれて決勝進出を狙うことになっている。村上は１組、シードレーンの７レーンに登場した。レーン紹介のときに大型映像に映し出されたときの表情はやや笑顔で落ち着いているように見えた。雨はわずかにこの時間帯はやんでいた。「ON　YOUR　MARKS」祈るような思いになった。「SET！」思わず息を呑んだ。ピストルが鳴って８人の選手が決勝進出を賭けて飛び出した。村上のアプローチはイメージどおり.。４レーンの朝霞第二中の田中選手がぐんぐんスピードをあげる。６台目を過ぎたあたりから田中選手が独走となり、それを追う２番手集団が村上を含めて４人がほぼ横一線。きわどい勝負となる。４人が立て続けにフィニッシュラインを駆け抜けた。すぐに第２曲走路上方の大型映像に目をやる。リプレイが映し出されていて、ゴール間際はスロー再生となる。村上の２着を確認した。１４秒６３、向かい風０．９ｍ。この大事な大一番で、彼女は向かい風の中、セカンド記録を出したことになる。立派である。彼女の決勝進出が決定したのだ。

「決勝進出おめでとうございます」と、声をかけられた。振り返ると東雲 OG、現東大阪大敬愛高２年の岡田萌であった。このジュニアオリンピックと併催されている日本選手権リレーに出場する敬愛チームの一員として横浜入りしていたのだ。「先生、村上さんすごいですね。」「萌も１年生のときの村上を知っているだけに、村上がここまで立派な選手に成長するなんて、あの時は想像もできなかっただろう？」振り返れば、２年前の１１年度、Ａクラス女子１００mYH でその岡田萌が６位入賞、さらにＣクラス女子１００mで山本祐莉が６位入賞、１２年度にはＡクラス女子１００mで西尾香穂が５位入賞。今回の村上の決勝進出の快挙で、東雲の選手が３年連続でスプリント種目のファイナリストになったことになる。

村上が大阪ベンチに帰って来た。「よくやった。でもおめでとうは言わないし、握手もしないよ。今は決勝でいかに戦い切るかに集中しよう！」と、声をかけた。今、ここで喜びをはじけさせると、決勝で戦えなくなってしまうという思いが強かったからだ。まずは大阪ベンチでゆっくりと休養させた。それから、マッサージ。「体のケアだけじゃなくて、心のケアの方もお願いします！」と、日本一の小西トレーナーにお願いしておいた。彼女はいつもどおりの平静を装っていたが、きっと心の中で今までに経験したことのないくらいのプレッシャーと戦っているに違いない。彼女は記録的には６番目で決勝進出を果たしている。ひとつでも、上の順位を狙わせたいのだ。決勝前のアップは動きづくりと速い動きのスピードプレイだけにとどめておいた。薄暗い選手招集所に送り出したときは、感慨もひとしおになった。招集所の奥にはまばゆいばかりのカクテル光線に照らし出された華やかなピッチが広がる。ちょうど、第２コーナーのスタンドに張られている「夢輝け！大阪東雲中学校」の横断幕が見えた。

１６時４０分。Ａクラス女子１００mYH 決勝。細かな雨が降りしきり、空は真っ暗。雨に濡れたタータン走路が、照明に照らし出されて鏡のように反射して美しい。この美しい夢舞台にファイナリスト８人が入場してきた。



ジュニアオリンピックファンファーレが場内に鳴り響く。決勝ともなるとこのファンファーレは格別で、いつも万感の思いを持って聞き入ることになる。８人のファイナリスト、それぞれがそれぞれの道のりを振り返りながら、それぞれの夢を持って挑むレースとなる。ましてや中学３年生のレースとなると、その思いはなおさらである。自分はメインスタンド前列中央の席にひとりで座って、村上のレースをしっかり見届けることにした。レーン紹介ではひとりずつ名前が呼ばれ、ひとりひとりの表情がアップで大型映像に映し出される。「８レーン、村上瑞季さん、大阪東雲、大阪」のアナウンサーの声に、大阪ベンチから「みずき～」の大声援。やや緊張した表情が笑顔に変わった。去年まで大阪大会の決勝に１度も残ったことのない選手が、中学１年生のときは１００ｍ１５秒台後半だった選手が、準決勝で１０台のハードルを越えて１４秒６３で走り、現実に今、目の前で全国の決勝でレーン紹介を受けているのだ。彼女のひとつひとつの動作を目に焼きつけるように見入った。

「ON　YOUR　MARKS」の声に場内が静まりかえる。「SET！」スターターの低い声。運命のピストルが鳴った。夢に向かって勢い良く飛び出す８人の選手たち。８人の選手がきれいにハードルを飛び越えていった。村上のアプローチも OK である。４台目あたり、村上は５番手前後。胸が高鳴った。攻めのハードリングができていると思った。準決勝で大会新記録の１３秒９０で走った朝霞第二中学の田中陽夏莉選手が飛び出す。それを追うのが夏の全中チャンピオンの大阪豊中十四中学の中司菜月選手。うしろの４人は村上を含めて混戦である。ほぼ横一線。７台目くらいから村上がわずかに遅れ出す。１着に田中選手。そして２着に中司選手、次々と選手がフィニッシュラインを越えていく。村上は最下位の８着か。軽快な音楽が流れて、ライブリザルツの発表が大型映像に表示される。もうひとつの大型映像のスクリーンにはそのリプレイが映し出される。１着の田中選手はさらに記録を更新して１３秒８５の大会新記録。（彼女はこの大会の女子 MVP で選ばれることになる。）２着に中司選手で１４秒０７．村上は８着で１４秒７０と発表された。

「先生、後半バテてしましました」と、村上。８位入賞の結果で満足するわけではない。それでも、大事な決勝レースで攻めのレースができたこと、さらに自分の力を出し切ることができたことに達成感はあったはずだ。自分も同じ思いで「８位入賞、おめでとう！」と祝福した。この３年間、陸上競技をがんばったご褒美に陸上の神様が彼女に決勝という晴れ舞台を用意してくださった。もちろん、彼女の決勝進出に賭ける執念や、そのがんばりが神様の心を動かしたからこそである。そして、８位。この結果は彼女のこれからの奮起をさらに促すもの

であり、必ずてっぺんを目指せ！という神様のエールであり、ささやかなプレゼントではないかと思った。

改めて中学陸上の魅力に感動している。少し前までは、村上のことを田中美調（みのり）２世と呼んでいた。田中美調は０９年大分全中に出場した選手。１００m１６秒台後半の選手が、努力を重ねて指定大会６本目のレースで全国大会参加標準記録を突破して、全国大会に出場する選手になったのだ。村上と同様、２年生までは大阪大会の決勝に進んだこともないし、１年生のリレーメンバーすらなれなかった選手である。全国大会では予選落ちに終わり、残念ながらジュニアオリンピックに出場することはできなかったが、彼女のシンデレラストーリーが大きく印象に残っていたのだ。ところが、田中美調物語には第２章があり、さらにドラマチックなストーリーが用意されていたのだ。東大阪大敬愛高校に進学した彼女は２年生から全国インターハイに出場する大選手になり、日本ジュニアでは日本一、さらに世界ユース日本代表になり、フランスに遠征している。惜しくも１００分の数秒の僅差で決勝進出を逃したが、準決勝まで見事に戦い切ったのだ。村上の全国への道のりは田中美調が教えてくれた道のりで、だからこそ、まったく揺るぎのない指導を貫徹することができたのだ。今回の全国のファイナリストになったことで、村上はもはや田中美調２世ではなく、村上瑞季１世となったのだ。この村上の道のりが、また村上瑞季２世を産み出すことになり、新たな１世がやがて誕生することでしょう。中学陸上の指導を始めて２３年目。この２３年間に出会った選手は、おそらく８００人近くになるはずです。そのひとりひとりの選手と泣き笑いを共にしながら、数々の失敗を糧にすることで今の自分の指導法がある。　　さらには歴代の先輩たちのがんばりがどんどん受け継がれて有形無形の力を今の選手に与え続けていくのだ。いつも言っていることだが、出会いこそ力であり、出会いにはいつも感謝しても感謝しきれないのです。

大会３日間があっという間に終了した。大阪は男女リレーがともに決勝進出を逃す残念な結果になったものの、２２人の選手が８位入賞を果たすなど今年も大活躍であった。大会最終日まで大阪選手団として大声援を送っていた村上が「もっと横浜にいたいです」と笑う。きっとあっという間の３泊４日の横浜遠征が夢のように感じたのでしょう。「もっともっと強くなりたいです」とさらに言葉を続ける。夢は見るものではなく、叶えるものであることを実感したはずです。村上瑞季物語第２章を今からとても楽しみにしているのだ。